

なぜスンナ派とシーア派は争うのか？

塩尻 和子

東京国際大学特命教授

イスラームの「宗派」とは？

宗教集団を統率する本山制度を持たないイスラームでは、当初から正統と異端を区別する意識はなかった。宗教的少数派も、基本的な教義から外れさえしなければ、少なくとも宗教上は異端として迫害されることもなく、同じモスクで祈り、ともにメッカ巡礼に出かけ、近所付き合いをして姻戚関係を結ぶこともできた。歴史の過程で分派間の確執や紛争が生じるのは、政治的覇権や経済的利害問題が背景にある時に限られてきた。昨今、イラクでは、スンナ（スンニ）派を中心とした「イスラーム国」がシーア派を敵視して大きな国際問題となっているが、その要因も「宗教的な宗派対立」ではないことに注意する必要がある。

イスラーム初期の分派発生が、預言者ムハンマドの後継者争いという政治的闘争によるものであったことも、こうした特徴をよく示している。ムハンマドの従弟で女婿であるアリーがようやく第4代「カリフ」（共同体の指導者）に就任した際、当時シリア総督であったムアーウィヤは彼のカリフ位就任を認めず、二人はシッフィーンの戦いで対峙することになった。アリー軍は戦闘では優勢だったが、敵側の戦略に嵌まって停戦協定を結び、それに反発したかつての味方が661年にアリーを暗殺するという事態が生じてしまった。

アリー家の悲劇はこれにとどまらず、ウマイヤ朝初代カリフ、ムアーウィヤの死去に伴って決起したアリーの次男フサインも、680年10月10日、カルバラーの荒野（バグダードの南南西約80キロ）で幼い子供や女性を含む一族郎党とともに戦死した。フサインは預言者の最愛の孫であり聖家族の直系であるために、彼の戦死は「カルバラーの悲劇」としてシーア派発祥の最重要モチーフとなった。

シーア派とスンナ派の特徴

シーア派という名称は、「アリーの党」という意

味の「シーア・アリー」に由来する。彼らは「アリーが友とするものを友とし、敵とするものを敵とする」を合言葉として結束し、アリーを初代の「イマーム」（最高指導者）に、次男のフサインは第3代イマームとした。シーア派が成立してはじめて、それ以外の多数派が「スンナ派」（ムハンマドの慣行と共同体の合意の人々）と呼ばれるようになったのである。

教義においてシーア派とスンナ派がもっとも異なる点は、預言者ムハンマドの後継者を誰にするかという点である。スンナ派では、イスラーム共同体の政治的および宗教的権威は信者の合意のもとに選ばれる最高指導者イマームに委ねられるとされ、預言者の後継者を意味するカリフをイマームとして認めてきた。一方、シーア派は、預言者の血縁者を、正確にはアリーとその妻である預言者の末娘の子孫を「聖家族」として認め、その中でもイマーム位についた者のみが預言者の絶対的で無謬の権威を受け継いでいると主張してきた。

イスラーム集団の指導者としてのイマームの存在は両派に共通した教義である。しかしシーア派では、イマームはムハンマドの血縁である「聖家族」によって継承され、それぞれの時代に一人しか現れない、神聖で絶対的な無謬の救世主であり、かつ宗教的にも政治的にも最高指導者である。

シーア派には多くの分派があるが、それは聖家族の子孫のうち、誰をイマームと認めるか、という違いによって生じている。最大分派の十二イマーム派では12代までのイマームの存在が認められている。最後のイマームは西暦874年に小幽隠に入り、940年には大幽隠に入ったとされ、現在も隠れて生きてると信じられている。この最後のイマームを「隠れイマーム」として崇敬する十二イマーム派では、イマームは終末の日に救世主（マフディー）としてこの世に再臨し、地上に神の正義を実現すると信じられている。

スンナ派では、アッバース朝の滅亡後も、さま



シーア派のイマームを祀ったフサイン・モスク。スンナ派のエジプト・カイロにあって、最高の格式を誇る（筆者撮影）

ざまな形で共同体の指導者であるカリフの存在が認められており、オスマン帝国ではスルターン（皇帝）がカリフを兼任する「スルタン・カリフ制度」が実施されていた。現代にいたるも、イスラーム社会の理想形としてカリフ制の再興を求める意見があつたことを絶たないことも事実である。

カリフの権威を認めないシーア派では、イマーム不在の期間はイスラーム法の専門家である「ウラマー」が信者を指導するために、ウラマーの位階が設定されており、最高位がアーヤトッラー・ウズマー（神の最高の徴）と呼ばれる。イラン・イスラーム革命後にはこれがさらに整備され、7位階が設けられた。そのためにシーア派ではイスラーム復興運動の担い手がほとんどの場合、ウラマーであることは興味深い。イラン・イスラーム革命を成功に導いたホメイニも最高位のウラマーであったことは、よく知られている。

他方、スンナ派のウラマーはほとんどが市井の一般人である。最近まで法学者となる資格にも、一定の基準はなかった。前近代では、裁判官・判事などのように定職に就くものも少数ながらあったが、多くのウラマーは別に生業をもっており、モスクなどで、無償で法律相談に乗っていた。

「宗派対立」はカモフラージュ

忘れてならないことは、スンナ派もシーア派も、教義上にはさまざまな相違があるものの、両派ともたがいに正統的であると認め合っていることで

ある。シーア派は少数派であるが、最大分派の十二イマーム派はイラン・イスラーム共和国の国教であり、また、アラウィー派はシリア人口の12%を占めるにすぎないが、大統領一族がこの派に所属しているために、両派とも政治的に大きな注目を集めている。

それでは、なぜ、互いに正統であると認め合っている宗派同士が、凄惨な対立を続けているのか？ 確実なことは、抗争の要因が「宗教的な宗派対立」ではない、ということである。

シリアの混乱は、スンナ派を中心とする反政府グループとアラウィー派政権との対立であると見られているが、双方ともにスンナ派もシーア派もキリスト教徒までもが入り乱れていて、一枚岩ではない。

イラクでは、南部のシーア派政権と、中部地域を支配しているスンナ派強硬派の「イスラーム国」との間の覇権争いが激化しているが、正確に言えば、これも「宗派紛争」ではない。これらの紛争は、意図的に仕組まれた貧富の格差と政治混乱のもとで、宗派に名を借りた熾烈な経済的利権闘争となっている。この闘争にスンナ派とシーア派の対立という、古典的なシナリオを纏わせることは、宗教的な大義名分によって本質的な要因を覆い隠す、姑息な手段に過ぎない。イスラエルとパレスチナの対立を「ユダヤ教とイスラーム」の宗教的対立に陥れて、効果的な解決の道を遠ざける超大国の策略と同じことが、ここでも行われている。

国際社会は、これらの紛争を安易に宗派対立だと決めつけて、非人道的な空爆によって解決を図るのではなく、いかに困難であっても、現地住民が真に望む政治的安定と経済的自立が実現できるように、双方を停戦と協議へと導く効果的な対策を実施すべきである。

しおじり・かずこ

東京国際大学特命教授、国際交流研究所長。東京大学大学院博士課程満期退学（博士（文学））。専門はイスラーム思想、比較宗教学、宗教間対話、中東地域研究。著書に『イスラームの人間観・世界観』（筑波大学出版会）、『イスラームを学ぼう』（秋山書店）ほか多数。『リビアを知るための60章』（明石書店）を改訂中。